コラム

「政治にもスロー・ライフが必要では」

客員研究員　新井 光雄♣

民主党政権が始動した。どうなるかと固唾を呑んで見守っているのが現状だろう。歴史的ともされる政権交代が実現した。国民の選択である。民主主義である以上、この交代をまずもってはよしとして、問題はさてとなる。むろん、全くの新政権だ。多少の余裕を、という面もあるのだが、新政権は、ちょっとあせりすら感じるほどの性急さがあり、戸惑いという感じが出てきていることも否定はできない。目下は複雑化といったような状況にあり、若干の不安感すら出てきているように思える。

エネルギー問題に関連しては予想もされていたとはいえ、マイマス２５％の目標がある。相当厳しい。環境省関係者あたりからも大変な数値という声があるなか、鳩山首相は就任前の民間の講演会で、実施を躊躇いもなく国内宣言。次いで国連の会議で世界に向けて国際公約。あれよあれよという間に確立した目標にしてしまった。かなりのスピードで、いかにも新生・民主党ともいえる一方で、いささか性急過ぎるという感じも拭えない。冷静にみれば、この目標はあくまで主要先進国の１３年以降枠組み参加が条件だから、歯止めはあるとする見方もある。この条件をどう考えるかで、問題は本質的に変わる可能性大なのだろう。いざとなれば条件が整わないということができるのだが、日本の外交力ではそんなことは出来ないというのが大方の見方だ。つまり、条件抜きにした実施を求められるということだ。その可能性は大きい。政府の審議会などでも数値目標が決められる場合、条件が付けられているのが、実際には数値が一人歩きする。そうなってしまうという宿命があり、審議会などでは数値目標にはかなり慎重、数値で示す場合は条件を前面に出すようになってきているのが最近の流れ。数値目標は示さないという傾向が強まっていきている。

個人的には数値目標があった方が策評価をしやすいので歓迎なのだが、どうしても一人歩きになりがちであり、無理しての数値目標には慎重であっていいのか、と思ってきていた。数値は功罪併せ持つ面があるということだ。そこでマイナス２５％はどうか。新聞などでは先にマイナス２５％が書き込まれ、続いて条件となっている。順番は、ともかく、条件も書いてあるが、最近出た関連の勉強会、研究会などでは条件面が問題になることは皆無で、マイナス２５％はどうなる、という議論ばかり。やはりそうなってしまうのかとの思いを深くした。数字は怖い。

もうひとつ問題となりだしたのは、決定のプロセス。確かにマニフェストにマイナス２５％は載っている。理屈では国民はそれを承知で民主党を選択した。実施は政権政党として当然の責務ということになるようだが、驚くべきことには、どう実現するかの手段が具体的にはどうやらないようなのだ。これは正直驚いた。国民負担なども実は検討されていなかったらしい。方法検討なきままの数値ということになる。

♣ 地球産業文化研究所理事　元読売新聞編集委員

これは無理がないのだろうか。どういう場での議論が必要なのか。審議会方式でいいのかどうか。この辺りには様々、その立場立場での議論もあろうが、擬似的であれ国民関与の場がなかったことはどういうことかとも思う。従来の審議会方式が隠れ蓑という批判があるとはいえ、全くないよりはましではないか。最低、関心のある国民も議論の中身を承知することができ、自分の見解を持つことが可能となる。一応の議論があり、そのうえでの政治決断となる。麻生前政権の中期目標はそうだったわけである。

ところが、民主党のマイナス２５％の根拠はマニフェストだけ。中身が空洞ということでは、これだけ重大な国際公約にしてはちょっと極端に過ぎはしないだろうか。

八ッ場ダムの問題は詳細を知らないから深入りしないが、これにしても性急にやめるだけでいいのかどうか。戸惑う国民も少なくないだろう。今後、同じような立地問題で深刻な事態が出てくる可能性がでてきてしまった。エネルギー問題でいえば、時間のかかる原子力問題などが不安になる。原子力の立地は時間がかかる。半世紀といってもいいような時間がかかるプロジェクト。民間が基本の問題とはいえ、政策全体は政府が強く関与する。民主党は政策部門の整理統合をこの四年で打ち出すようで、これは多少安心したのだが、サイクル関連で大きな問題に直面することになる。原子力、基本方針などを明確にしてほしいところ。原子力立国計画ではブレナイ政策が表明されていたが、このあたりがどうなるのか。不安感をもつ関係者は少なくない。

多分、最大の問題点はマニフェストの位置づけだろう。絶対公約としてしまうのかもっと融通のきく柔軟な目標とするのか。このところがポイント。目下、絶対公約という雰囲気なのだが、柔軟であった方が安心感がある。新政権誕生後、改めてマニフェストを読んでみたのだが、民主党のマニフェストにもいいところがあるし、自民党のマニフェストも捨てがたい。だめと思えるところも双方にある。真面目に検討しだすと選択しての投票はできないということになってしまう。一度、この視点からマニフェストを再読することを勧めたい。ジレンマに陥ることを保証する。

政権走り出し。多少の問題は必然なのかもしれないが、もう少しゆっくりできるではないだろうか。それには国民の寛容さも不可欠。マニフェストは絶対視しなければ批判を受ける、という脅迫観念を民主党に感じるからだ。理論は明快ですむが現場は複雑怪奇。問題の質が違うわけで、結論としてはしばらく様子を見るという陳腐なことになってきてしまった。

それにしても、今日もテレビで民主党の議員がある問題でそれはマニフェストに書いてあり、実行、実施すると一刀両断。うーんと唸ってしまった。